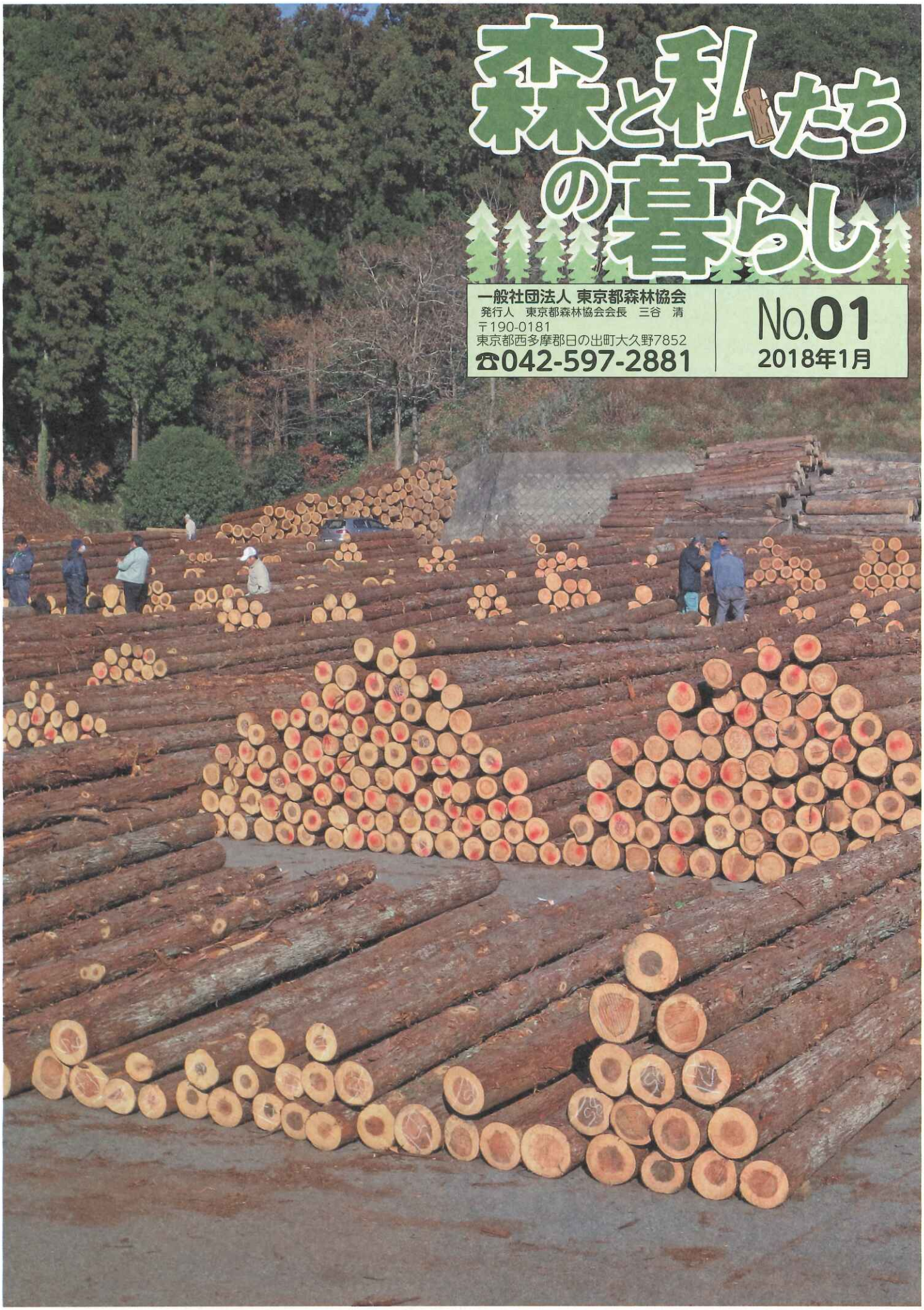


森と私たちの暮らし

一般社団法人 東京都森林協会
発行人 東京都森林協会会長 三谷 清
〒190-0181
東京都西多摩郡日の出町大久野7852
☎042-597-2881

No.01
2018年1月

東京都森林協会設立のお知らせ

私ども「東京都森林協会」は、東京の森林が自然豊かで多様な環境を維持しながら、継続的に優良材が生産できるよう、森林の保全、林業・木材産業の振興を通じて地域社会の活性化に貢献していくことを目的として設立されました。
この目的を達成するために、次のような事業を行ってまいります。

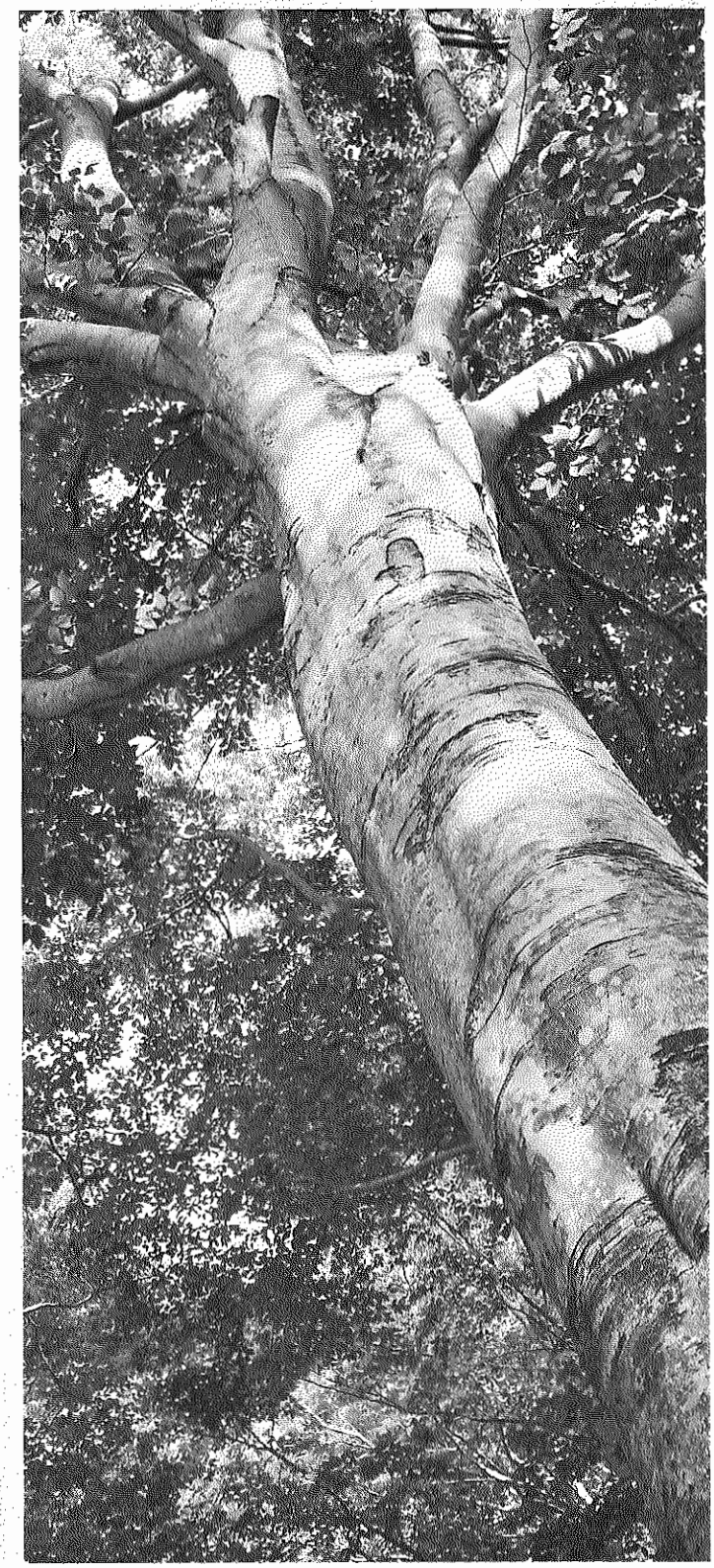
1．森林・林業・木材産業の振興に関する資料収集、調査研究、普及啓発
2．多摩産材の利用促進
3．林業労働力の確保、育成
4．森林・林業関係団体相互の連絡調整
5．その他、協会の目的を達成するために必要な事業

具体的には、多摩産材流通促進事業（認証協議会員の登録管理、認証協議会の開催、トレーサビリティ確認など）、とうきょう森づくり貢献認証制度の運営（申請者の掘り起し等）や林業労働力充足対策事業（他県労働力・事業者の調査・勧誘）などを行ってまいります。

また、これまで東京都森林組合連合会（平成２９年９月末に解散）が行っておりました、東京都林業普及協会、日本林業経営者協会多摩会、東京都林業研究グループ協議会の事務局を引き受け、その運営を当協会で行ってまいります。

林業関係者皆様の深いご理解とご指導を当協会に賜りますよう、何卒宜しくお願い致します。

東京都森林協会 会長　　三谷　清



森と私たちの暮らし

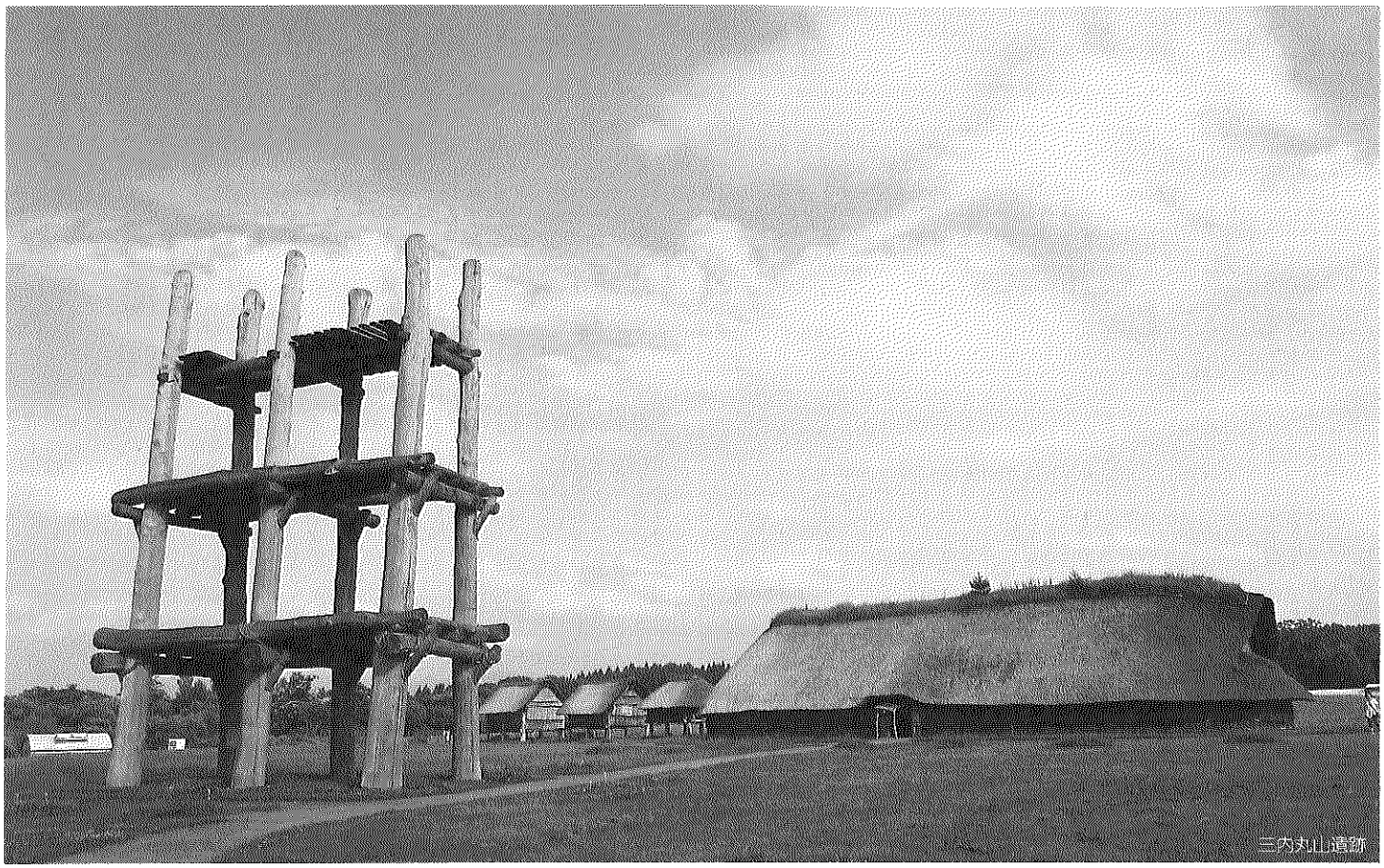
日本は、森の国です。現在でも国土の三分の二は豊かな森に包まれています。温暖で多雨な気候が、世界屈指の森林率を誇る国土を生みました。世界に冠する大都会東京でも、多摩地域を中心に、今なお都域面積の３割を超える土地が森林に覆われています。

日本は、木の文化の国とも言われます。たしかに、神社仏閣をはじめ多くの建造物は太くて立派な木材で造られています。ひと昔前までは、武家屋敷も、民家も、ほぼ全ての家屋が木造建築でした。見事な工芸品の多くも、木材を材料としています。和紙の原料も樹皮ですね。縄文時代前中期の大規模集落跡として知られる青森県三内丸山遺跡には、クリの大木を使った建物があり、集落の周りでは漆やクリの栽培がおこなわれていたことが知られています。この日本列島で人々が暮らし始めたその初めから、私たちの暮らしは、森と密接な関係にあったのです。

歴史の流れから見ればごく最近ともいえる１９６０年代まで、私たちが使う燃料は薪と炭でした。ご飯を炊くのも、ふろを沸かすのも、薪でしたね。今、現代の都市に暮らす私たちは、森のことを感じたり、考えたりすることがほとんどありません。でも、私たち、そして私たちの子供、孫、子々孫々が健やかに生きていくためには、やっぱり森が必要なのです。

小鳥の声を聴きながら森の中を歩く気持ちよさは、何物にも代えられません。秋の落ち葉を踏みしめて歩く山道のすばらしさも、失いたくありません。森と共に暮らすことは、自然の中で生まれた生き物である私たちにとって、贅沢ではなく、必要なことなのです。現実の脅威になってきた地球温暖化に対応するためにも、自然が与えてくれる循環型の資源である木材をもっと上手に、もっとたくさん使うことはとても大切です。

森を守り、森を活用する林業をもう一度、見直してみませんか。



三内丸山遺跡

多摩木材センター・木材市況

【多摩木材センターの概要】

多摩木材センターは、秋川街道沿い、二つ塚峠から五日市方面に少し下ったところにある、都内でただ一つの原木市場です。平成5年1月の第1回原木市の開催以来、多摩地域の森林から出材される原木（丸太）の大半を扱っています。原木市は毎月10日と25日の2回開催で、「競り（せり）」による原木の販売を行っています。

原木市に出材する側の荷主は、ほとんどが都内の山林所有者か伐採業者ですが、近県からの荷主もいます。現在の最大の荷主は花粉対策事業（平成28年度からは、森林循環促進事業と名称変更）を行っている東京都農林水産振興財団で、市場総取扱量の70％が財団からの出荷です。

買方は毎回三十人程度が参加します。多摩地域の製材業者だけでなく、半数近くは埼玉県の製材業者です。

扱っている丸太の樹種は、約7割がスギ、約2割がヒノキ、それ以外のサワラ、マツ、カラマツ、モミ、ケヤキ等広葉樹などが残りの1割です。原木の取扱量は、1回の市では平均700立方メートル（㎥）、年間約1万7千㎥前後です。

【多摩産材】

多摩地域では、平成18年から森林所有者や木材産業関係者が協力して「多摩産材認証制度」を立ち上げ、需要拡大に取り組んでいます。森林経営計画の認定を受けた森林など、適正に管理された多摩の森林からから伐り出された丸太には、認証確認書と出荷確認書が添付されます。丸太の木口には多摩産材マークが刻印され、製材品には認証シールが貼られて売買されます。

認証協議会が認証する「多摩産材」の量は、年間約1万3千m3程度です。公共事業などで木材を使う場合は、多摩産材を指定する場合が多く、多摩木材センターの市でしか入手できない多摩産材を買う目的で、原木市に来る買方も多くなっています。

【原木価格】

原木（丸太）の価格は、昭和50年代をピークに下がり続けており、多摩木材センターでの全木平均単価は、1㎥当り1万円程度まで落ち込んでいます。20年前と比べても三分の一程度の価格です。ここまで材価が低くなると、積極的に山の管理を行う山主が減り続け、用材として使える樹々がなくなってしまうという、取り返しのつかない事態が、もうそこまで来ているのではないかと危惧されます。

平成29年度7月にカナダで大規模な山林火災があった影響で、北米地域からの原木供給量が大幅に縮小しました。この影響で世界全体の木材需給がタイトとなり、輸入製材品と合板の価格は上昇を続けています。国内でも製品の流通価格は2割前後上昇しており、一部では国産材への切り替えが起きています。

【スギ丸太】

この市場で扱っている丸太の約7割がスギです。建築用に利用される直材で、径16cm以上、材長3mと4mの丸太の年間を通じた平均価格は、1㎥当りで1万円前後です。毎年、秋口から多少の上昇が見られますが、せいぜい1万2千円止まり。元玉だけの平均でも1万5千円止まりです。スギ柱材（材長3m・径14～18cm）は、ここ数年売れ行きが悪く、低価格が続いています。中目から太物については、最近になって、じわじわとですが価格上昇しています。

【ヒノキ丸太】

ヒノキは、高級材のイメージがあり、丸太価格もスギの2倍程度の高値を保ってきましたが、近年は次第に価格が低下し、スギとの価格差がどんどん縮まっている傾向です。

ヒノキ柱材は、値動きが激しい品物で、毎年、値の下がる夏の時期は12,000円を切る一方、晩秋から冬場には2倍以上の25,000円以上となります。出荷者側も、出荷の時期を見極めるのが大切です。

【もや材（細丸太）】

多摩木材センター市場では、径10～13cmの細丸太を「もや材」と呼び、1本単価で売買しています。もや材は細い角材を取るほか、丸棒加工する製品も多いようです。杭や造園材料として多用されるため、公共工事の材料需要が増える冬場から春先までが価格高となる傾向があります。